

校内授業研究会の成果と課題

成果

- ・年間で少しずつグループ活動や話し合い活動に慣れるよう計画したことで、児童間での仲間意識や助け合いの気持ちを高めることができた。
- ・学期毎に授業をルーティーン化したり、単元計画を具体的に示しゴールが見えるようにしたりすることで、児童が見通しを持って意欲的に学習することができた。
- ・ICT（タブレット端末）を使った活動を多く取り入れたことで、集中を継続させたり、得意なことを生かすことができたりする児童が多くいた。

課題

- ・話し合いの目標を達成するための ICT 活用が不十分であった。児童の実態に対して本時のねらいが高かったので、より児童にわかりやすい工夫（写真などの視覚情報、大きさ）が必要であった。
- ・座標軸をどうして使うのか具体的な説明が必要であった。目標を達成するための手段としてタブレット端末だけではなく、児童の実態を踏まえて、紙媒体なども視野に入れて児童が選択できるとよかった。
- ・場の設定として、話し合いの際に教室を分けてもよかった。視覚、聴覚情報が多くなってしまった。
- ・知的障害学級と自閉症・情緒障害学級の合同の授業の際には、ねらいや目標が異なってくるので、特別支援学校学習指導要領（生活・国語）（自立活動）、学習指導要領（国語）を踏まえ、具体的に一人一人の目標を立てて、教職員間で共有していくことが大事である。
- ・本時の一人一人のめあてと手だての振り返りと評価をして、次の活動につなげていく。また、日頃より担任・教育支援員の間で共有していく。

1 年間の成果と課題

日記

・連絡帳で日記を書く際に、「いつ、どこで、だれと、だれが、どうした、思ったこと」などを継続して指導することで、自発的にその日のことを書いたり言ったりすることができるようになってきた。

ICT 端末活用の成果

・ICTを活用した学習やウォーミングアップを授業や自立活動を取り入れることで、児童の興味・関心を引いたり、意欲を継続させたりすることができた。

・書くことへの負担を減らし、楽しく学習することができた。

・タブレット端末を使うことで、入力や操作の力がついて、交流先の学級の授業でも生かすことができた。

・知的障害学級と自閉症・情緒障害学級の協同的な学びに生かせるようにするには、より明確なICTを活用する目的や準備が必要であった。

学年の取り組みで特に効果的だったものについて

・異学年の小集団チームでの活動を継続することで

- ①ひまわり学級の友達の特長や異学年集団での自らの立場を理解し、よりよい関わり合いができるようになった。
- ②異学年集団の中で自分の役割を理解して、教師や友達と一緒に意欲的に活動したり、助け合ったりする姿が見られるようになった。

今年度の研究についての振り返り

・知的障害学級と自閉症・情緒障害学級との合同授業を通して、生活単元学習と国語科、国語科と自立活動の目標や一人一人の目標・支援について整理し、年間の単元計画を立てることができた。学級を超えて、チームでの話し合いや活動を増やし、児童が自分達で決めたり、よりよくしたりできるように計画をした。よりよい話し合いや活動にするためには、より細やかな目標と支援が事前に必要であることがわかった。個別の目標が大きく異なる子ども達が、より楽しく意欲的に活動していくために、一人一人の具体的な目標、振り返り、評価を日々共有していくことが大切である。